戦争への怒りや悲しみダンスに

神戸・藤田佳代舞踊研究所

「慰霊の日」の23日 沖縄で披露

前衛的なモダンダンスを追求する「藤田佳代舞踊研究所」（神戸市東灘区住吉本町１）のメンバーが、太平洋戦争の沖縄戦が事実上終結した「慰霊の日」の23日に合わせ、沖縄県内で創作ダンスを披露する。主宰する藤田佳代さん（74）は「この日の沖縄には、奥深い感情がある。その気持ち、そして戦争に対する怒りや悲しみを、ダンスという形で表現したい」と話す。（久保田麻依子）

沖縄での演舞に向けて、稽古に励むメンバー＝神戸市東灘区住吉本町１

同研究所は1978年に創設され、子どもから大人まで約230人が在籍している。毎年開催する自主公演のほか、東日本大震災の復興をテーマにしたダンス公演などを行ってきた。

慰霊の日の公演は、沖縄県読谷村に住む藤田さんの知人が、同研究所の活動を紹介したことから実現。2013年に続き2度目の招待で、今回は藤田さんとダンサー5人が、22日から3日間の日程で現地を訪れる。

藤田さんはダンスの構成と振り付けを手掛けた。戦禍を生き延び、今も反戦を訴える沖縄の「オバア」たちの悲しみを表現した作品や、尺八の音色をバックに、戦争への怒りを「黒い影」に見立てて表した「心月（しんげつ）」など、戦争犠牲者に対する悲しみと平和への祈りを込めている。

ダンスは全身を伸びやかに使い、静と動が組み合わさった独創的な動きが特徴で、表情の細かい変化も見どころ。ダンサーの5人は「沖縄の苦しみを深く知ることができないが、人の豊かさや海への思いを踊りで伝えたい」と口をそろえる。

現地では、慰霊の日に糸満市である「国際反戦沖縄集会」での公演や、読谷村役場のロビーコンサート（22日）に出演。24日は米軍飛行場の建設地に予定されている名護市・辺野古の浜で、観客なしで、海への畏敬を込めて舞う。

読谷や糸満 辺野古巡り 平和への祈り込め公演